

第23回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時 令和4年11月17日（木） 午後4時00分～午後6時00分

場所 職員会館かもがわ 大会議室

出席委員（敬称略）：

＜現地会場＞池坊専好会長、赤松玉女副会長、笹岡隆甫副会長、内田隆委員、
奥野史子委員、奥山理子委員、河島伸子委員、建畠哲委員、田中誠二委員、
松田規久子委員、矢島里佳委員、やなぎみわ委員、山極寿一委員、山本毅委員、
吉田良比呂委員

＜オンライン＞藤澤浩一委員

事務局：山中博昭文化芸術政策監、砂川敬文化芸術都市推進室長、長谷耕治京都芸大・文化連携推進部長、坂根朋子美術館担当部長、山口壮八文化財担当部長、橋本悟担当部長、山下聡担当部長ほか

1 開会

2 議事 京都市の文化芸術政策の現状と方向性について
事務局から資料説明後、別紙のとおり意見交換

3 閉会

本市の文化芸術政策の現状と方向性について

吉田委員

- ・ 文化芸術に関わる様々な状況の変化の中、政策を担っている私どもが特に課題に思っていることについて御意見を頂きたく、3点挙げさせていただく。
- ・ まずは「文化庁移転後の文化政策の在り方について」である。京都市立芸術大学（以下、「京都芸大」）も文化庁と同じく来年移転するため、合わせて御意見を頂きたい。その他、「子どもたちが文化芸術に出会い、親しみ、心豊かに育つまちの実現について」、「文化政策の効果について」も御議論の中で御意見を頂ければありがたい。

笹岡副会長

- ・ 文化庁移転後の文化政策の在り方については、みんなで文化について考える・議論する場があるとよい。京都は現代アート、伝統文化の両方を有している。行政では難しいかも知れないが、率直な意見を聞ける懇親会のような場があればよいのではないか。
- ・ インバウンドについては様々な取組でフォローされているが、京都・日本から海外への発信をサポートできる仕組みもあればと思う。
- ・ 堺市ではテーマを設けない作文に取り組んでいると伺った。好きなことを好きなように書くことは心の教育、文化芸術にもつながっていくのではないだろうか。

奥野委員

- ・ 久しぶりに海外からの観光客が増えており、円安によって購買意欲も高い。この時機をとらえ、海外からのお金を京都に呼び込む取組を加速させることが重要である。
- ・ コロナ禍から回復する中で、子どもたちにはもっと色々な体験をしてほしい。和装も京都の伝統文化であり、若手に技術を引き継ぐことが重要。そのためにも、まずは子どもたちに伝統文化・伝統的な衣装に馴染んでもらう、暮らしの文化を体験してもらうことに、社会全体で取り組むことが必要ではないか。
- ・ 文化政策の効果については、コロナ禍の中で文化によって心が救われたのか・豊かになったのか・生きる力を与えられたのかを、数字だけでなく言葉で発信していくことが重要。文化庁も移転してくる中で、京都の魅力の発信力強化に取り組んでほしい。

矢島委員

- ・ 乳幼児期から文化芸術に親しむことが、感性豊かに生きていくためにはとても重要だが、その機会が乳幼児に提供されるか否かは、親の文化芸術への感度が大きく影響すると感じている。様々なことにお金がかかる子育て世代が、文化芸術にお金を使うかは家庭ごとに大きな差が生まれやすいと感じる。そこで例えば、未就学児のいる家庭に毎月展覧会等の招待券を配布するなど、子育て世代の金銭的負担がなく、親子で文化芸術に触れる機会を継続的に提供し続け、当たり前で文化芸術に親しめる環境作りができればよいと思う。
- ・ 欧米では主流のインパクトレポートを、文化政策の指標作りの参考にしているかどうか。自分たちで尺度を生み出し、それに対して、定量的・定性的なデータを収集して、インパクトを発信することが重要ではないか。私が経営する会社では、いくら売れたかも大事だが、「日本の伝統との出逢いを何人に届けたか」を重視している。このように、どういった目的を達成したいのかを踏まえてインパクトレポートを作ることができれば、自分たちが真に大切にしていることを社会にわかりやすく伝えられるのではないか。
- ・ 伝統工芸の職人さんたちを、意識的にアートの世界に巻き込んでいくことも重要だと思う。

山本委員

- ・ アマチュアの方がどれだけ文化芸術に取り組んでいるかがそのまちの文化度に現れてくる。つまり裾野の広さが大切で、そのためにしっかりとした土台を築くことが重要。
- ・ アマチュアの活動は「大人」と「未成年」。そしてこの「未成年」がさらに「中高生」と「児童」に分けられるが、私に取り組んでいる管打楽器の分野への入口は中高生のときの部活動という人が多い。この部分の質を上げていくことが必要である。
- ・ 吹奏楽の分野では、コンクールで金賞を取るような学校の演奏は非常に立派で素晴らしいが、学校ごとの質の差がすごく大きい。ただ、質の高い学校であっても問題がいくつかある。
- ・ 1つ目は、過度な長時間練習や有害な身体的トレーニングである。これらが、中高生時代に吹奏楽に取り組んでいても、大人になると離れてしまう一因になっているのではないか。
- ・ 2つ目は、コンクールへの偏重である。技術も重要ではあるが、音楽の素晴らしさを楽器の演奏を通じて感じる大切である。
- ・ 3つ目は、楽器の問題である。質の低い楽器が多く出回っているが、金銭的な問題だけでなく、きちんと見極められる指導者が足りないのも原因の一つである。
- ・ 指導に当たっては、それぞれの楽器のスペシャリストが教えることが重要であり、どこにそのような指導者がいるかと言うと京都市立芸術大学の卒業生である。多額の報酬が無くとも、地道に子どもたちの活動にアクセスできる指導者は多く、そこをしっかりとつなげばよいのではないか。
- ・ また、部活になじまない芸事、ギター・ピアノといった楽器もある。これらの分野に、小さな子どもたちが触れられる環境も重要。ドイツでは講師を自治体が雇用し、公立で安価に教育が受けられていた。芸術は生きる力を生むものであり、プロの演奏を聴くことも素晴らしいが、実際に習うことを通しての効果は非常に大きい。その環境を社会が整えてあげることが重要である。

赤松副会長

- ・ 文化庁移転後の文化政策の在り方について、小中学校では現在、英語やプログラミング等が授業に入ることによって美術・図工・音楽といった芸術教育を学ぶ時間数が減らされている。「選択すれば芸術体験ができる」、「家庭によっては芸術に触れられる」というだけでは社会的に弱体化してしまう。子どもたちに文化芸術を広げていくことは社会の土台、根幹ではないだろうか。京都ならではの義務教育への文化芸術の位置付けに取り組んでほしい。
- ・ 京都芸大については、移転によって大学へのアクセスが良くなるため、学生の発表・展覧会・ワークショップ等に学外の人が入ることができる仕組みとしていきたい。現在、プレ事業として社会人が参加しやすい取組を試行している。移転後に取組を本格化し、芸大に来れば文化芸術に触れられる形としていきたい。

建畠委員

- ・ 文化庁、京都芸大が移転するという京都にとって大きな出来事が続く。文化庁の移転は京都の文化を発展させるためのものではないが、京都はたくさんの文化施設を持っており、その魅力を生かしていくことが重要である。
- ・ 京都芸大の活性化は大いに期待できる。そのうえで、周りの地域が変わっていていることも重要。移転予定地の南では、THEATRE E9 KYOTOをはじめとした文化施設が稼働し始めている。京都芸大の周りにも画廊、ワークショップを行う人などが増え、まち自体が変わっていくことになれば嬉しい。
- ・ 京都には5つの芸術大学があり、それを大いに生かすべきなのだが、美術に関して言えば、卒業後に学生が定着している・画廊が活性化しているかということと全く逆の状況。東京一極集中が進行している。
- ・ 行政がアートフェアを重視する必要性は理解できるが、その経営や組織、地域特性の実態をよく知らないまま取り組んでいる。アート市場活性化を打ち出すのであれば、しっかりとリサーチしたうえで取り組む必要がある。

河島委員

- ・ 文化庁は京都を活性化するために来るわけではないとは言え、移転を機に京都の文化行政への注目度は上がる。京都市では、本日報告いただいたこと以外にも、定番としての美術館、交響楽団といった取組のほか、子どもから大人、現代アートから伝統文化まで幅広くコンプリートされた取組が行われている。この点は胸を張ってよいものだと思う。
- ・ 京都の特徴は、やはり生活文化の厚みである。その生活文化を支える足元が弱まっている現実があるため、生活文化の分野において「この点は京都が先んじている」という事例が出てくると良いのではないか。
- ・ 子どもの頃に見たものが非常に退屈だったため、もう行きたくないという学生の声を聞くことがある。たくさんの機会を設けることは重要だが、取組内容が効果をあげているか、検証をすることも重要である。
- ・ 文化政策の効果測定は非常に難しいが、「人数は少なくとも、国際的に高い評価を受けている」、又は「国内の他の施設と連携して他地域から高い評価を受けた」など、定性的な情報を補っていくことが大切ではないか。平面的な数字に加え、アーティストの言葉、批評が加わると立体的に見ることができる。毎年モニタリングするだけでなく、指定管理者の切り替えのタイミングなどで数年おきに行う調査・評価を組み合わせることが京都市で取り組めることではないだろうか。

藤澤委員

- ・ 日本の伝統工芸をビジネスとして海外にデジタル発信し、それが伝統工芸を支えることにつながっている事例がある。文化芸術をサステナブルとするためにはビジネスとして成立しているかが重要である。
- ・ 東京で暮らしていると、京都の膨大なコンテンツに触れる機会はあまりない。海外にいる人の方が京都に注目していることが多く、文化庁には京都の文化芸術を海外に発信する役目をきっちりと担ってほしい。
- ・ 太秦という撮影所を持つ京都において、映像産業の底上げがあるとありがたい。日本の映像コンテンツを京都が発信するほか、海外の映像コンテンツを京都に呼び込み、京都を紹介することも重要である。映像で取り上げる場所をコントロールすることで、オーバーツーリズムの解消にもつながるのではないか。
- ・ 文化政策の効果については、特定の人気コンテンツを同じ人が楽しむのではなく、多様なコンテンツを用意することで、より多くの人にリーチさせる考え方もあると思う。

田中委員

- ・ コロナ禍の中ではあるが、京都観光も元に戻りつつある。多くの観光客を受け入れる一方で、文化的な資源を守る・維持する・磨き高める仕組みも両輪として考える必要がある。経済に注目が行きがちだが、両者を連動させて総合的に展開することが重要である。
- ・ 子どもたちと文化芸術の出会いについては、小学校の教育現場において文化・展示物の鑑賞体験をしっかりと広げ、子どもたちが素養・教養として文化に慣れ親しむことにより、文化の裾野を広げ、シビックプライドへとつなげていくことが重要である。
- ・ 日本料理アカデミーが本物のだしを子どもたちに味わってもらうイベントを継続的に実施している。京料理も10月に無形文化財となったことであり、自分たちの人生の楽しみとして文化に慣れ親しむ仕組みづくりに、関係者が連携して関わっていくことが重要だと思う。

松田委員

- ・ 子どもたちが文化芸術に出会い、親しみ、心豊かに育つまちの実現は、誰もが目指したいところだと思う。ただ、子どもたちが安価に楽しめる音楽会・教室を企画している方々が学校にチラシを置こうとしても様々な縛りがある。教育委員会と文化行政でもう少し連携する仕組みができないだろうか。子どもたちだけでなく、せめて親御さんに情報が届けばと思う。
- ・ アートがビジネスとしてグローバルに発展していくことは良いことだが、一方で文化財の保存が重要。重要文化財であっても速やかに修復に取り組めない状況であり、保存の取組が足りていない。アート市場一辺倒でなく、バランスを考えることがとても重要だと思う。

奥山委員

- ・ 障害者芸術では、その当事者だけでなく、そこに関わる方々も含めた交流の在り方が大切。ただ、現状では障害者の支援、福祉、ダイバーシティをテーマにおさえておけばそれでよいといった風潮を感じる。そこに留まるのではなく、どういった社会を目指すのかを様々な分野の方を交えて議論を進め、目標を見出すことができればよいのではないかな。
- ・ 特別支援学校やフリースクール、養護施設の子どもたちがいる現場とアーティストとのコーディネート依頼を頂くようになってきたが、なぜここにアーティストが来ているのかを子どもや先生自身もよくわからないでいる場合もある。アーティストが来れば即豊かな変化がもたらされる訳ではないので、もう少し根本的なところを確認し合うことが大切であるにも関わらず、その時間が持てていないのが現状である。さらに文化施設関係者からも「取り組みたい気持ちはあるが、障害のある方を受け入れることに対しては失敗できないので踏み込めない」という声を聞くことがある。こういった事例に対応するためにも、失敗を許容・考察しながら次につなげていくような空気感・仕組みを作ることができればよい。

やなぎ委員

- ・ 子どもたちの文化芸術に関して、京都には伝統芸能をはじめとする様々なカルチャースクールや教室があるが、その参加者は高齢者が多い。もう少し若い世代のカルチャーと融合をはかるなどして、子どもたちがもっと参加できればと思う。
- ・ 周辺が世界遺産という学校も多く、映画を見ようと思えば出町座、みなみ会館といったミニシアターもある。作家は恵まれた環境からだけでなく、貧困・戦時中であっても生まれるものではあるが、文化的な豊かさは重要で、京都は非常に贅沢な環境だと思う。
- ・ ただ、コロナ禍によって子どもたちの身体的な体験は激減した。作曲、文学、絵画にもAIが参入し、創作面でもデジタル化が進んでいる状況を、子どもたちはよく知っており、抵抗なく受け入れて実践している。日々進むデジタルの偏重に対して、創造と身体がつながっている実体験を、これから取り戻してほしい。

内田委員

- ・ 中央市場付近で「梅小路まちづくりラボ」という組織を作り、モノづくり、アート、食をテーマとしたまちづくりを行っている。アーティストの集うKAGANHOTELをはじめ、まちの中にアートがある取組に民間でも取り組んでおり、行政にはそれらをつなげるための取組を進めてほしい。
- ・ メタバースに関しても、京都のまちを仮想空間上に作ってNFTに取り組もうという話も出ており、京都で行えば発信力もある。京都芸大において市民がオープンに入っていける場を作っていただけるとも聞いており、大きく期待している。
- ・ ただ、京都芸大移転の意義が経済界の中にも伝わり切っていない。私自身も折に触れて伝えてはいるが行政としてもしっかりと伝えてほしい。

山極委員

- ・ 今年生誕100周年に当たるドナルド・キーンさんが「京都人は過去を捨てていない」と書いている。和服を着て、畳の上で生活し、筆を使って文字を書く、そういったまちはもはや京都しかないのではないか。京都の人はずっと美を追求しているとも言え、それが京都人の生き方、文化ではないだろうか。
- ・ 京都の文化の本質は清潔さ・簡素さにある。京都議定書を発効し、世界に地球環境京都宣言を行ったように、日々の暮らしの在り方は価値観につながるものである。平安・室町・江戸を通じて培った簡素さと清潔さ、それが環境の保全や人々の助け合いにつながっている。それを世界に発信できる、タイムスケールが非常に長く、いつでも昔に戻れるまちが京都であるとも言える。
- ・ 京都には、京都市民の1割に相当する学生がおり、そのうちの1割は外国人留学生である。京都で価値観を学んだ人が、今や世界中にいることをしっかりと意識しておく必要がある。また、京都には芸術系大学だけでなく約40の大学、さらには大学コンソーシアム京都もある。大学・学生を京都の文化に位置付けて外向けに発信していくための連携が必要である。
- ・ 京都は千年以上の歴史が今に息づき、あらゆる生活の営み・リズムがすべて総合的にデザインされている。総合文化・総合芸術であることを意識してブランド化していくことが重要である。それを、文化庁移転を機に形にできれば大成功ではないか。
- ・ 今は外国人の方が京都の文化を理解しているかもしれない。変化を恐れることなく彼らをよく取り込み、新しい京都の文化、新たな文化芸術を作っていくことが必要。伝統文化に取り組まれている人こそ、こういった意識を持って取り組むことが重要である。

山中政策監

- ・ 本日頂いた様々な御意見を踏まえ、政策に反映してまいりたい。

池坊会長

- ・ 様々な角度から文化政策の効果というものをとらえていただく必要がある。
- ・ また、できるだけ環境・経済によって子どもたちが影響を受けないような機会の提供が必要。文化事業では成功や思ったとおりの反応といったことを期待しがちだが、文化は生身の人間同士がぶつかりあって生まれるものであるため、失敗も重要な次へのステップかと思う。